

考古学から見た夫余と沃沮

Fuyu and Woju Viewed from an Archaeological Perspective

宮本一夫

MIYAMOTO Kazuo

はじめに

①夫余の考古学

②沃沮の考古学

おわりに-夫余・沃沮と東夷

【論文要旨】

夫余は吉長地区を中心に生まれた古代国家であった。まず吉長地区に前5世紀に生まれた触角式銅剣は、嫩江から大興安嶺を超えオロンバイル平原からモンゴル高原といった文化接触によって生まれたものであり、遼西を介さないで成立した北方青銅器文化系統の銅剣であることを示した。さらに剣身である遼寧式銅剣や細形銅剣の編年を基に触角式銅剣の変遷と展開を明らかにした。それは吉長地区から朝鮮半島へ広がる分布を示している。その中でも、前2世紀の触角式鉄剣Ⅱc式と前1世紀の触角式鉄剣Ⅴ式は吉長地区にのみ分布するものであり、夫余の政治的まとまりが成立する時期に、夫余を象徴する鉄剣として成立している。前1世紀末から後1世紀前半の墓地である老河深の葬送分析を行い、副葬品構成による階層差が墓壇面積や副葬品数と相関することから、A型式、B型式、C・D型式ならびにその細分型式といった階層差を抽出する。この副葬品型式ごとに墓葬分布を確かめると、3群の墓地分布が認められた。すなわち南群、北群、中群の順に集団の相対的階層差が存在することが明らかとなった。また、冑や漢鏡や鏡などの威信財をもつ最上位階層のA1式墓地は男性墓で3基からなり、南群内でも一定の位置を占地している。異穴男女合葬墓の存在を男性優位の夫婦合葬墓であると判断し、家父長制社会の存在が想定できる。A1式墓地は族長の墓であり、父系による世襲の家父長制氏族社会が構成され、南群、北群、中群として氏族単位での階層差が明確に存在する。これら氏族単位の階層構造の頂点が吉林に所在する王族であろう。紀元後1世紀には認められる始祖伝説の東明伝説の存在から、少なくともこの段階には既に王権が成立していた可能性が想定される。夫余における王権の成立は、老河深墓地の階層関係や触角式銅剣Ⅴ式などの存在から、紀元前1世紀に遡るものであろう。

沃沮は考古学的文化でいうクロウノフカ文化に相当する。クロウノフカ文化の土器編年の細分を行うことにより、壁カマドから直線の煙道をもつトンネル形炉址、さらに規矩形トンネル形炉址への変化を明らかにし、いわゆる炕などの暖房施設の起源がクロウノフカ文化の壁カマドにある可能性を示した。さらにこうした暖房施設が周辺地域へと広がり、朝鮮半島の嶺東や嶺西さらに嶺南地域へ広がるに際し、土器様式の一部も影響を受けた可能性を述べた。こうした一連の文化的影響の導因を、紀元前後に見られるポリッツェ文化の南進と関係することを想定した。

【キーワード】 夫余、触角式銅剣、沃沮、クロウノフカ、炕